

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 20 日現在

機関番号：35404

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520357

研究課題名(和文) 第一次世界大戦後の散文作品における叙情詩的技法の影響 - セリーヌを中心に

研究課題名(英文) The influence of lyrical art of poetry over the prose after WW1 -- about the work of Louis-Ferdinand Celine

研究代表者

杉浦 順子 (SUGIURA, Yoriko)

広島修道大学・商学部・准教授

研究者番号：30594361

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は100周年を迎えた第一次世界大戦に注目し、それを兵士として体験した作家セリーヌの作品を中心に、その体験の創作する主体への影響を観察し、またその記憶を読者と共有する際に用いられた表現手法、とりわけ詩的ジャンルの影響について分析することを目的とした。2回の研究発表と論文執筆を通して、癒し得ない体験の記憶を表現する手法について論じ、セリーヌ作品におけるジャンル混淆性や叙事詩的な前期作品と叙情詩的後期作品との変化を分析し明らかにした。また本研究にもとづいて市民公開講座を行い、研究成果を広く公にすることができた。

研究成果の概要(英文)：On the occasion of the centenary of the First World War, this study was the objective to show the influence of this landmark event in modern France the creative subject, among others on the fighter Celine, and to analyze the way retain and make revive his memories of the past. We have shown, through two communications and an article, some peculiarities at Celine, including the influence of methods in its poetic way of expressing unthinkable war experiences and share them with readers. We also organized a public course on the same theme to make it public the results of our study.

研究分野：フランス文学(20世紀前半小説)

キーワード：ルイ=フェルディナン・セリーヌ 第一次世界大戦 記憶 ジャンル 叙情性

1. 研究開始当初の背景

(1) セリーヌことルイ=フェルディナン・デトウーシュ(1894~1961)は、しばしば「戦争から生まれた作家」と形容されるように、二十歳で参戦した近代戦争の経験は決定的であり、セリーヌのエクリチュールの原体験と言っても過言ではない。以上の点をふまえ、2009年5月にフランスのルーアン大学に提出した博士論文 *Humour et humeur chez Louis-Ferdinand Céline une esthétique du noircissement* の第一部では、トラウマ的な戦争体験が作家の思想形成に与えた影響を明確にし、それを戦争世代に共有される喪失体験、一種のロスト・ジェネレーション現象と捉えて論じてきた。

しかし、この戦争体験を語り始める「私」と、「話し言葉を書き言葉に移し替えた」と作者が主張し続けたエクリチュールが提起する問題は、一つの世代の問題として閉じることなく、より大きな20世紀の小説芸術の変貌の中で捉えることもできるのではないか。第一次世界大戦直前から両大戦間にかけて、「詩的物語」*récit poétique* と呼ばれる叙情詩的特徴を志向する小説があらわれるが、セリーヌ文学もこのような(叙情)詩と混交する小説ジャンルの問題から捉え直す意義を感じた。

(2) 本研究を開始した2012年は、すでに第一次世界大戦勃発から百年という節目が迫っていることを見据え、国内外で関連文献の出版や研究が盛んになることが予想できる時期であった。実際、国内ではいち早く、2011年に京都人文文学研究所の研究班による「第一次世界大戦の総合的研究に向けて」の成果として、フランス文学関係では久保昭博氏による『表象の傷 第一次世界大戦からみるフランス文学史』が、フランスを含めた美学関係では河野真理氏による『葛藤する形態 第一次世界大戦と美術』が出版されている。以上

のことから第一次世界大戦との関わりから文学を研究するのに最適な時期を迎えていた。

2. 研究の目的

(1) 初めての近代戦争である第一次世界大戦は、これまでの戦争概念を覆し、それ以前の間人同士が戦う叙事詩的戦争記述を不可能にしてしまった。本研究では、二十歳でこの戦争に参戦したルイ=フェルディナン・セリーヌの処女作『夜の果ての旅』(以下、『旅』と省略)の草稿を検証し、まずは唯一の戦争体験を語る主体「私」の成立過程を明らかにすることで、これが個人の歴史に基づいた自伝的な「私」である以上に、世代で共有される戦争体験を語る資格を備えた、一種の普遍性を備えた主体であることを示すことを目指した。

(2) さらに、この主体の形成にはじまり、叙事詩的記録から叙情詩的記憶へと移行するエクリチュールの動きを分析し、叙情詩的技法を志向していくセリーヌ文学を、第一次世界大戦前後から現れ始める、レアリスムに継ぐジャンル混淆的な「詩的物語」と呼ばれる散文作品の流れに位置づけていくことをさらなる目標とした。

3. 研究の方法

(1) 初年度：まず、言葉にしがたい戦争体験を語る主体「私」の成立過程を明らかにするため、渡仏の際に『旅』のすべての草稿類を比較検証することが初年度の課題となった。パリにあるフランス国立図書館(BNF)が所蔵する、『旅』のもっとも古いと思われる草稿に加え、このBNFにある草稿と出版原稿との間に位置すると考えられる閲覧不可能な草稿については、この草稿の研究を含んだジャン=ピエール・ドーファンの博士論文(ソルボンヌ大学図書館所蔵)を閲覧し、結果をまとめた。

また、フランス、カンにあるIMEC(現代

出版資料研究所)を訪れ、セリーヌの後期作品で、第二次世界大戦の体験をもとにして執筆された『またの日の夢物語』(以下、『夢物語』と省略)の草稿を閲覧し、創作過程で消失したエピソードの検証や文体の変化をたどる予定であった。しかし、後述するようにこの草稿は閲覧不可能であったため、研究計画をいくらか修正した。

草稿研究に並行して、他の戦争体験作家の作品、とくにセリーヌと同世代のドリュ・ラ・ロシェル、サンドラールらの作品を読み進めた。

(2) 中間年度：

前年度に続き、関連する小説作品を読み進めるのと同時に、20世紀初頭の小説ジャンルに関する文献、特に叙情詩や自伝、パンフレ、オートフィクションといった、語る主体と表紙を飾る著者とが同一人であることを前提とするジャンルに注目して作品および、理論面での文献調査を進める。こうした作業をとおして、ジャン＝イブ・タディエらが「詩的物語」と呼んでいる概念についても独自に考察を深めた(Jean-Yves Tadié, *Le récit poétique*, Gallimard, 1997)。

上記の成果をまとめ、秋季の学会発表で口頭発表を準備。発表を通して、専門家の批評を仰ぎ、それを参考に論文執筆に励んだ。

(3) 最終年度：前半は、記憶と文学についての考察にあて、関係する文献の読解に励んだ。記録とはことなる文学的な記憶のあり方についての考察を深めながら、論文執筆をすすめた。

年度後半は、研究の総括、ならびに研究の将来的展望について見通しを立てた。

(4) 研究計画の修正について

本課題でとくに中心的に扱う予定であった『夢物語』は、フランスのカンにある IMEC

に赴いて、より正確な書誌情報を確認した結果、個人所蔵で閲覧が困難な状況にあることがわかった。やむを得ず、後期作品の草稿研究を入れずに、『旅』および『夢物語』の出版された原稿の範囲内で、両作品を比較して行く方向で論文をまとめることに修正した。

4. 研究成果

(1) セリーヌの『旅』草稿研究について

本課題の一年目に予定した BNF ならびに BIS (ソルボンヌ大学図書館)における、『夜の果ての旅』の草稿ならびに、J=P・ドーファンの博士論文閲覧に関しては、順調に進んだ。BNF での草稿閲覧は博士論文執筆時に一度閲覧した箇所の再確認を行った。また BIS では、ドーファンの博士論文を閲覧することができた。

処女作の主体「わたし」が作者と部分的に名前(フェルディナン)を共有する人物ではなく、もう一人のアルチュールという人物によって発せられていたことは、すでに指摘されていた(Henri Godard, « II, Une version antérieure de la première séquence de *Voyage au bout de la nuit* » in *Les Manuscrits de Céline et de leurs leçons*, Tusson, Du Lérot, 1988, p. 35-48 ; Henri Godard, « Ça a (vraiment) débuté comme ça » in *Année Céline 2000*, p. 143-149.)。それでも今回、実地に検証を行った結果、語り手である「わたし=アルチュール」が、作家の分身を思わせる「わたし=フェルディナン・バルダミュ」に定着するまでの逡巡は、初期手書き草稿だけでなくその後のタイプ原稿にも及ぶ、ある程度長い期間に及んでいたことが理解できた。また、登場人物の命名に関する逡巡のあとは、プロローグの数ページに限らず、おもに戦争を扱っている最初の50ページほどのあいだに見出されること、また候補に挙がっていた名前のなかには、作家の祖父の名前オーギュストも見出せること

も確認できた。

(2)研究発表と論文執筆について

日本フランス語フランス文学会において、2012年秋、2013年秋の二回にわたって発表を行い、うち2013年におこなった発表をもとに論文を執筆し、2014年に発表した。

2012年10月の発表について

この「L.F. セリーヌにおける大衆文化への郷愁とメランコリーの詩学」と題した発表（日本フランス語フランス文学会秋季大会、於：神戸大学）では、「メランコリー」という言葉を過去への断ちがたい執着と理解し、そこから戦前の失われた時代、さらには大衆言語への深いノスタルジーをエクリチュールによって留めようとするセリーヌの独自性を浮かび上がせることを目指した。特にロシアのミハイル・パフチンが「ジャンルの記憶」(『ドストエフスキーの詩学』)と呼んだ、かつての大衆文化の形式をエクリチュールで再現する手法に注目し、本課題を導くきっかけとなった文学的な記憶のあり方について、後期作品『夢物語』のみを分析対象にしたが、説得的な議論が展開できず、セリーヌ文学における記憶という問題性を提示するにとどまった。

2013年10月の発表について

「セリーヌ作品におけるジャンルの問題——物語から抒情詩的散文へ」と題しておこなった発表では、前回の発表の反省を踏まえ、処女小説『旅』と第二次世界大戦後最初に執筆された『夢物語』を比較分析し、記憶を留めようとするエクリチュールに関する両者の違いを明確にし、セリーヌ文学における手法の進展を示した。『旅』においては、まず草稿研究に裏打ちされる形で、主体「わたし」の誕生とその揺らぎについて示し、そこからこの小説のジャンルの多様性（パンフレ、大

衆小説、自伝）が生じているという説を立てた。さらに、小説後半では、世代に共有される行動を起こし、集団的記憶をかたっていた「私」の役割は、いわば叙事詩的なそれへと移行し、ロバンソンという極めて虚構性の高い人物の出来事を語る役割を担うことになる。このように処女小説では、戦後行き場をなくした新しいタイプの人間に、あたらしいアイデンティティのよりどころを与えるかのようにロバンソンという新しい人物を造形することが重要であり、それ自体が戦争を若い頃に体験した世代の記憶であったことがわかった。

これに対し、後期の『夢物語』では、ロバンソンのような虚構性の高い人物はなく、素材そのものは極めて自伝的といえる。またストーリーの物語性は極めて低く、一夜の出来事が延々と繰り返しも含んで語られる。さらに、初期小説で特徴的であった比喩表現は、おそらく知覚してから比喩表現へ転換するという知的作業を排除するため取り除かれ、後期作品では語り手を感じた、叫びそのものを定着させることが試みられている。上記のように、後期作品の特徴は発話状況そのものを再現であると結論づけ、セリーヌ的な言葉の生成の場そのものを読者に追体験させるような手法を叙事詩的とし、初期の手法と対比的に提示することができた。

の発表をもとにした論文について

発表当初は曖昧さの残った理論的な部分を執筆段階ではより明確に表し、上記のセリーヌにおける叙事詩的な手法から叙情詩的技法への発展を説得的な形で示すことができた。

その他

2014年12月には、所属する広島修道大学の「ひろみらセンター」が主催する市民向けのオープン・アカデミーにおいて、「100

年後の今、フランス文学を通して第一次世界大戦を読み返す『バルビュスとセリーヌ』を行い、2014年度にフランスで出版された多くの第一次世界大戦文献から得た情報をわかりやすく提示し、この大戦の近代性を示し、その上で文学表現に及ぼした戦争の傷痕を、バルビュスとセリーヌの代表的な戦争小説から明らかにした。アンケートの結果では、聴衆からおおむね好評をいただくことができた。

(3) その後の展望について

今回の研究を通して読んだ第一次世界大戦の戦闘員作家の作品に、この戦いで右腕を失った作家サンドラールの作品も含まれていた。サンドラールは戦後もっとも早い時期に「ルクセンブルグでの戦争」(1916)という詩を発表。さらに2年後に散文詩ともパンフレとも言われる「J'ai tué」(1918)を、やはり戦闘員であり、戦争に関わる絵画も残したキュビズムの画家フェルナン・レジェエによる挿絵付きで出版している。さらに長い時間において、第二次世界大戦も終わった頃に自伝的散文テキスト『切り落とされた手』(1946)を発表し、そこで入隊の経緯から、右腕を失ったことなど第一次世界大戦での体験を綴っている。今回のセリーヌのジャンル混淆性にも通じる、この韻文から散文への移行は、今回残念ながら、十分に論じる場を持てなかったが、記憶装置としての散文ジャンルの可能性について、さらに同時期の絵画作品への影響にも視野をひろげながら、今後、再検討を試みたい。

さらにもう一人、今回、十分に扱えなかった作家に、ポール・モランが挙げられる。セリーヌがその影響を公言し、「ジャズ」にも比したその文体は、「オートフィクション」と言われる形式と相関関係にあるように思われる。モランの作品傾向はむしろ第一次世界大戦前後のモダニティ文化との親和性が

高かったこともあり、2013-14年の発表や研究成果論文でモランについて論じる場が持てなかった。今後、「レ・ザネ・フォル」les années folles と呼ばれる大戦後の世界へ目を向ける際に論じることを考えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

杉浦 順子「セリーヌ作品におけるジャンルの問題 ——物語から抒情詩的散文へ」、フランス語フランス文学研究、査読有、第105号、2014、253-267頁。

〔学会発表〕(計 2件)

杉浦 順子「L.F. セリーヌにおける大衆文化への郷愁とメランコリーの詩学」、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会、2012年10月(於：神戸大学)

杉浦 順子「セリーヌ作品におけるジャンルの問題 ——物語から抒情詩的散文へ」、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会、2013年10月(於：別府大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉浦 順子 (Yoriko SUGIURA)
広島修道大学・商学部・准教授
研究者番号：30594361

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：